

朝倉山椒ノ由來

ト呼ブモノハ *C. baccatum* L. 卽チ Bird-pepper ト稱スル一種ノ實カラ製シタモノデ其レハ其實ヲ日乾シ粉ニシテ鹽ヲ交ゼタモノデアル○屬名ノ *Capsicum* ハ整シ或ハ刺戟スル意味ノ字カラ來タモノデ卽チ其實ノ辛辣ナル味ニ基ヅキ名ケタモノデアル

○朝倉山椒ノ由來

牧野富太郎

さんせう(山椒)卽チ秦椒ノ一品ニ朝倉山椒ト云フモノガアル山椒中ノ上品ナモノト評價セラレテ居ル、枝上ニ刺ノナイ一變種 *Xanthoxylum piperitum* DC. var. *inerme* MAKINO. デアルガ其枝葉花實ノ狀ハ大シテ山椒ト違ヒハナイ、其由來ニ就キ『若水篤信本草倭名辨』ト題スル寫本ニ次ノ如ク詳記シテアル、此書ハ幹貞(姓未詳)ト云フ江戸ノ醫者ノ著シタモノデ此人ハ元ト但馬ニ居ッタトイフコトガ此書ノ文中ニ見エテ居ル

「朝倉山椒ハ其由來但馬養父郡朝倉ノ郷ト云處アリ一郷ニ七個村アリ其内ニ今瀧寺村アリ村ノ中ニ今瀧寺ト云寺アリ故ニ村號トス今瀧寺ノ宅後石崖絶壁アリ高サ十丈許其上ニ廣サ百步許ノ平塹ノ地アリ五六步許引退テ又絶壁上エ立コト十丈許アリ其半岫平塹ノ處自然生ノ蜀椒アリ地ヲ撲シテ茂盛ス其處エハ鳥ナラデハ至コト不能絶崖ノ上ヨリ見出シタルニヤ人ヲ籠ニノセテ釣下テ山椒ノ接穂ヲ取シト云其接木世間エ弘マリ今ニ至テ朝倉ノ名日本國中ニ滿ツ近代丹波國山椒ヲ多ク作り世間ニ貨スルニヨリ人朝倉ヲ丹波ノ事トス蜀椒ノ種子丹波ニモ別ニ有ヤ抑又但馬ノ朝倉ヲ接ヒロメタルカ未知之ヲ」【牧野云】文中「地ヲ撲シテ」トハ地ニ滿ツル意デアルト思フ

尙右ノ朝倉山椒ニ就キ向井元升ノ『庖厨備用和名本艸』ニ次ノ如ク出テ居ル

「蜀椒シヨフセウ 和名抄ニ蜀椒ナシ多識篇ニナルハジカミ今マ俗ニ云アサクラザンセウ……○元升曰本邦ノサンセウハミナ花ナクシテ實ミラムスブ蜀椒ノ類ナリアサクラザンセウノミニカガラズシカレドモアサクラザンセウハスケレテ本艸註ニミニタルニヒトシ」

又、平野必大ノ『本朝食鑑』ニハ左ノ文ガアル

「山椒」〔釋名〕蜀椒 〔朝倉ハ但州ノ地名其地山椒多ク産シテ氣味形色他種ナリ故ニ之ヲ稱ス〕

〔集解〕凡ノ椒素ト但ノ朝倉ヨリ丹州ニ移ス故ニ丹産モ亦通俗ニ朝倉ト稱ス其椒ハ

又、宮崎安貞ノ『農業全書』ニハ次ノ様ニ述ベテ居ル

「川椒」〔釋名〕蜀椒 〔朝倉ハ但州ノ地名其地山椒多ク産シテ氣味形色他種ナリ故ニ之ヲ稱ス〕 實ふとく色香味共によし。是を椒とばかり云へきを。出る所國によりて。つねのさんせうな。秦椒とよび。蜀椒をあさくらさんせうと號するなり。丹波。但馬より出る。朝倉と云は。つねの山椒とは。其枝葉かはりて。別の物なり。」

又、寺島良安ノ『倭漢三才圖會』ニハ次ノ様ニ記シテ居ル

「朝倉椒 あさくらさんしやう 按ズルニ朝倉山椒ハ始メ但馬ノ朝倉谷 〔其谷ノ兩岸四五町ヨリ出ヅ丹波丹後ニ多ク其枝ヲ接ギ今ノ人以テ丹波ノ朝倉ト爲ス近頃奥州津輕ノ産亦類大ニシテ氣味勝レリ京師大阪ノ人家ニ枝ヲ接グト雖ドモ多ク長ゼズ四五年ヲ經ル者希ナリ山椒ノ名此ニ據ル其樹ハ刺無ク葉ハ大ニシテ顆モ亦他椒ヨリ大ナリ夏月小花ヲ開ク其目光リ黒最モ美ナリ其子生ノ者ハ佳ナラズ枝ヲ以テ接グベシ〕 原文ト

又、稻生若水ノ『若水本草秘錄』〔寫〕ニ次ノ如クアル

「蜀椒 和名サンセウ 和産但馬朝倉之産上品也和俗ニアサクラザンセウト云ナリ又越前ニモ朝倉ト云所アリ其レニハアラズ丹波丹後次之」

又、貝原益軒ノ『大和本草』ニハ左ノ通り記シテアル

「朝倉山椒ハ但馬ノ朝倉ノ里ヲ初トス其後丹波ニモ植フ香氣烈シ常ノ山椒ニ葉モカハリハリスクナシ」

更ニ小野蘭山ノ『本草綱目啓蒙』ニハ次ノ如ク出テ居ル

「蜀椒 ナルハジカミ和名 フサハジカミ 同上 アサクラザンシヤウ 唐山ニテハ蜀ノ國ノ山椒ヲ上品トス故ニ蜀椒トイフ本邦ニテハアサクラザンシヤウヲ上品トス蜀ノ國ノ種ニハ非ザレドモ蜀椒ノ名ヲ借り用ユコノ品元但州朝倉ヨリ出ル故アサクラザンシヤウト云フ今ハ丹波ニ多ク傳ヘ稱テ其地ノ名産トナレリ攝州有馬ニモ多ク栽ユ……今藥家ニハ朝倉ザンシヤウノ子ヲ去リ殼ノミヲ賣ル葉ハ常椒ヨリ大ニシテ木ニ刺ナシ實ハ常椒ヲ三ツ合セタル大サニシテ辛味多ク香氣多シコノ木枯レ易シ故ニ多ク接換ス」

朝倉山椒ノ由來

右書ノ外ハ今此ニ省略スル

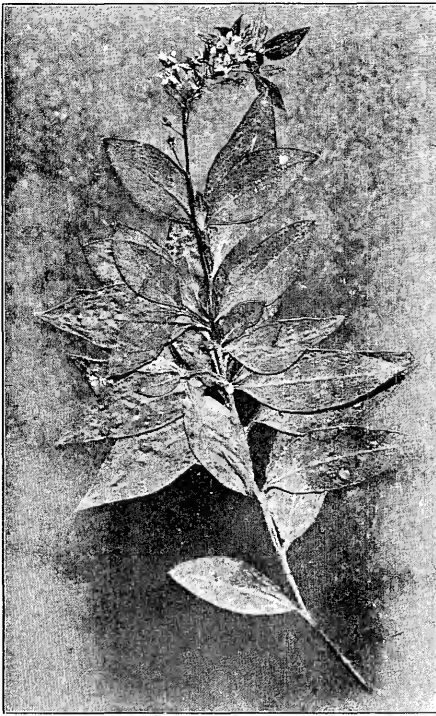
謂ユル朝倉山椒ハ其枝ニ刺ノ無キ一品デアッテ往々人家ニ栽エラレテ居ル刺ガナイカラ葉ヲ採ルニ頗ル便利デ

復ビ花莖カラ葉ヲ簇出スル實例ヲ報ズ

アル、樹ニヨリテハ極メテ短キ刺ガ枝ノ中ニ現ハレルコトモアル、又處ニヨツテハ必ズ短キ刺ノアルモノガアツテ長キ刺ノアル普通ノさんせうト刺ノ無イ朝倉さんせうトノ中間ニ立ツテ居ルノヲ見受ケル、私ハ曾テ此短刺ノ品ヲ Var. *brevispinum* MAKINO. トシテ發表シ其和名ヲやまあざくらさんせうトシテ置イタ

○復ビ花莖カラ葉ヲ簇出スル實例ヲ報ズ

久 内 清 孝



の へ の と か (Lysimachia clethroides DUBY.)

余ハ本誌五ノ九號ニ於テ花莖ノ先端カラ葉ヲ出スあかそノ例ヲ報ジテ置イタ處神奈川縣警察部衛生課ノ片島正治氏採集標本中ニをかとらのをノ花穂ノ先端ニ葉片簇出シテ居ルモノヲ見出シタ
 コノ標本ニツキ觀察シテ見ルト花軸カラ一本ノ枝ガ出デ其枝ノ先端カラ數葉ガ散出シテ居ル而シテ此ノ枝ノ下ニハ花梗ノト同形同大ノ苞片ガアルカラ此枝ハ苞腋ニ生ジテ居ル譯ダ
 此點カラ考ヘテ見ルト此ノ場合ハ花梗ノ先端ニ着クベキ花ガ葉ニ變ジタモノデアルカラ花梗ノ先端ニ著葉シタノデアアル
 從ツテ本誌五ノ八ニ竹中理學士ガあらせいとうニ就テ詳說サレタ場合ニ接近シテ來ル